

# 「いばらき建設技術研究会」会報 平成11年度 第1号

平成11年9月20日発行

## 1. 平成11年度総会の開催について...総務班

・去る7月16日(金)、ひたちなか市「ワ - クプラザ勝田」において、平成11年度第1回理事会に引き続き、総会が開催されました。会員総数580名のうち、総会出席者は485名(委任状出席335名、非会員54名)でした。総会では、役員・運営委員の異動、平成10年度の事業報告および決算、平成11年度事業計画および予算の3点について審議され、原案の通り承認されました。

質疑の中で、10年度の執行残額すべてを11年度に消化する事業計画になっているが、毎年、このように残が出るとは限らないので、余裕として残すようにしたらどうかとの質問に対しまして、事業の執行については、出来るだけ節約して実行することで了解を得ました。

第2点は、会員の多いグループでは、研究会の具体的な活動状況が伝わってこないこと、理事会・総会などの行事日程などについて余裕をもって連絡してくれないと調整がとれないとの意見がありました。これに対して、広報等のあり方や連絡手法について運営委員会で再度検討を進めることになりました。今後とも、会員にわかりやすい運営を心掛けることが必要ではないかと思えます。

・総会に先立って行われました、本研究会の山形会長のあいさつの概要につきまして、次に紹介いたします。

「御紹介いただきました、会長を務めさせていただいております茨城大学の山形でございます。本日は、御多忙の中「いばらき建設技術研究会」の総会に御出席下さりましてありがとうございます。また、会員の皆様には、日頃から本研究会の活動を担っていただくと同時に、盛り上げていただきまして、厚くお礼申し上げます。

本研究会は、昨年7月9日に設立総会を行いまして、ようやく1年が過ぎたところでございます。会の活動につきましては、設立総会で御承認いただきましたように、分科会活動を中心といたしまして、会員の皆様の参加をいただくということと、その参加の場を通して自己研鑽をしていただくということを第1の目的としております。そのような参加の成果としまして、分科会における研究成果を特に会員の皆様に還元するということで、我々の会の特色というものを出して行きたいと考えているところです。

この方針に基づきまして、運営委員長、各運営委員の皆様、あるいは事務局の方々の御活躍によりまして、5つの分科会すなわち「新全総」、「茨城の建設遺産」、「植物を中心とする公共空間」、「橋梁」、「GIS」(地理情報システム)の各分科会が立ち上がりまして、本日この後でそれぞれ御発表いただけますことは、大変素晴らしいことではないかと思っております。特に自らの技術力を高めようとする意欲というようなものが盛り上がってきているという点に関しましても、大変喜ばしいことなのではないかと思っております。

さて、最近の建設というものを考えてみますと、行財政改革であるとか、いわゆるボ - ダレスの社会とか、あるいは情報化という社会の中で大変厳しいものがあります。今のところ、公共事業に関する補正予算というようなことで、失礼な言い方もかもしれませんが、とりあえずは息をついているといった状況があり、これが打ち切られることを考えた場合、楽観を許さないといった面がありま

すし、その他の面においても、様々な意味で閉塞感があるように思います。

これに対しまして、現在、コスト縮減とか、場合によってはリストラとか様々な取り組みが行われております。これは、我々建設に携わる者にとって、本来、社会資本の整備を担って行くということで非常に重要なことではありますが、どうも内向きに努力しているというような感じがあります。今後は、いかに広い分野に、あるいは、いかに広い世界に向かって踏み出して行くのかということを実際に考えて行かなければならないところにきているのではないかという気がします。それには、様々な方法があると思うのですが、私の個人的な考え方というか、一つの視点ということで述べさせていただければ、やはり建設工学というものが、必ずしも土木だけではないと思いますが、かなりの部分を占めるシビル・エンジニアリングといった見地から見てみますと、もう少しシビルということにこだわって物事を見るという視点が大事ではないかという気がします。

一つ紹介させていただきますと、イギリスの土木学会が最初に設立総会を開いたとき、やはり土木技術とは何なのかという定義をいたしました。それは、The arts directing the great sources of power in nature for use and convenience of man.という定義でした。訳してみますと、「自然の持つ偉大な力の源泉を人間の利用と便利さのために振り向ける技術」というようなことで、実は二つの点で気に入っております。一つは、for use and convenience of manということで人間のためにといいるところと、もう一つは、directingという言葉を使っていること、すなわち自然を克服するという言葉を使わず振り向けるという風に言っていること、ある意味からすると自然を壊すということではなく、共存して行くんだというニュアンスを込めていることです。use and convenienceがついておりますがfor manという部分、この部分を考えていくことが土木という中で非常に重要になってくるのだと思います。たとえば、市民の皆様にとっては、生活基盤の面でまだまだ不満を持っている状況にあると考えられます。しかるに、ややもすると我々建設業界の人間は、官に依存する面が強くて、人間を見るというか、社会の動きを見るということをおろそかにしている面があるのではないかと思います。これからは、外に向かうということを考えるに当たっては、何が市民生活に必要なのか、人間の社会に対して何か付加価値をつけて行くというような発想が従来にも増して必要となるのではないかと考えます。そういう付加価値をつける原点というのがやはり、市民的な見地というようなものに基づく発想、すなわちシビルというような気がいたします。そういう中で、地域に根ざしたものと、また産業的には隙間産業といわれるようなもので我々が見逃しているというようなこととか、さらには、そういう発想に基づく様々な社会づくりのプロポ - ザルを行うといったようなことへの能力が必要なのではないでしょうか。そういう意味において、これからの土木というものを考えると、技術的な側面に加えて人間とか社会とかに目を向けて、文化、歴史、環境などの幅広いバックグラウンドをもって、本当の意味でのシビルという見地で行動して行くことが非常に重要なことだと考えております。もう一つ、これは、前回でも申し上げましたが、個々の技術者が自立するという立場が必要なのではないかという点です。最近の例では、新幹線のトンネルでコンクリ - トの破片が落下するというような事例においても、テレビで見ますとコ - ルドジョイントというようなことについて、現場責任者が知らなかったというようなことであったり、また昨日でしたか、東芝の社員が消費者の苦情に対して暴言を吐いたとかそういうことがインタ - ネットのホ - ムペ - ジに出されてしまって問題になっているというようなことがあります。このようなことを考えてみますと、これだけ社会が高度化し多角化した中では、末端といったら言い過ぎかもしれませんが、本当の個々の技術者が技術力を持ち、責任感を持ってやって行くということをしないう限り、ひどい目に遭うという時代になってきて、これは情報化という中では必然的に起こってくる問題ではないかと思います。そういう意味で個人としてまずし

っかりと確立し、その上で組織化される事が重要であると思います。従来は、組織があれば弱兵無しといった面がありましたが、これからは、やはり個人々々を非常にしっかりと造っていかないと、いくら束でもそういう組織はできてこないのではないかという気がいたします。

先ほどの付加価値というようなことを考えてみましても、仕事に携わる個別の技術者一人々々がしっかりとした理念とか市民的な発想とかをもって始めて、個々の仕事を進める中で工夫であるとか、改良であるとか、プロボ - ザルであるとかそういうものが出てくるのではないかと思います。

このような時代だからこそ、これまで述べたような方向性が求められていると言えるのででしょうし、「いばらき建設技術研究会」が会員の皆様にとって、自己研鑽のもとに本当に能力を発揮できる状況をもって行くということが本会の大きな役割なのではないかという気がいたします。最初に申し上げましたが、そういう意味で、目的に向かって分科会というものを中心に皆様が参画されるという運営方針で本研究会を今後とも進めていただきたいと考えているところです。最後に皆様の積極的な本研究会への御参画ということをお願いいたしまして御挨拶に代えさせていただきます。」

---

### (研究発表会・特別講演会)...事業班

・総会に引き続きまして、第1部で分科会の各テ - マごとに研究の成果や今後新たに組みたいテ - マについての発表が行われました。

昨年の総会で承認されました2つのテ - マ 新全総を考える、茨城の建設遺産をさぐる、につきましては、検討のための時間が限られ、一定の成果を上げるまでには至りませんでした。作業経過の発表があり、引き続き今年も作業を継続して進めること、新たに、橋梁を考える、植物を利用した公共空間づくり、GISについて、の3つのテ - マが加わり、それぞれ提案者から取り組みに関する報告がありました。会員の皆様には、ぜひ積極的な参加をお願いいたします。

・第2部では、特別講演としまして、つくばの通産省地質調査所環境地質調査部 環境地質研究室長の遠藤 秀典様に、「防災・環境保全に関する地質環境調査について」と題して、OHPを使用して、地盤の地滑り災害や地震災害時の地盤挙動や地質的原因、地盤沈下や地下水の汚染などについての特別講演を実施いたしました。

## 2. 運営委員会の開催状況について...総務班

### (第1回)

5月31日(月)、職員会館におきまして、運営委員会と分科会と合同で開催され、運営委員長以下25名の運営委員の参加によりまして、新全総のテ - マの絞り込みや分科会活動報告の内容について、12年度事業計画、総会の段取りなどについて審議しました。

### (第2回)

6月29日(火)、県庁会議室において、運営委員長以下16名の出席で、理事会・総会時の資料の最終確認や役割分担、研究発表会の発表者などについて審議しました。

### (第3回)

8月4日(木)、FPメディアステ - ション会議室において、会長、運営委員長ほか30名の運営委員が参加して開催されました。議題は、総会の時の質疑を含めまして、今年度の分科会の進め方について、広報・連絡手法のあり方について、今年度の現地見学について その他、について

話し合われました。審議内容の結果につきまして紹介いたします。

については、まず分科会の各テーマごとに、分科会長(運営規則上は主査)、副分科会長(副主査)を正式に決定すること、本年度の事業計画を作成し運営委員会に提出して助成金を確保すること、が決まりました。

については、まず連絡については、統一した連絡様式を作成し、配布連絡先を明示すること、また、連絡については、Fax、Eメール、ホームページの複数の連絡を行うこと、さらに、各グループにおける連絡網・連絡手法を一覧にして事務局へ提出すること、が決まりました。

一方、広報については、広報誌を年2回発行し、その間を埋めるため、ホームページによって新しい情報を配信するように努めることが決まりました。

については、承認された事業計画に基づいて、県内の小山ダム見学の案内書を早めに作成して参加者を募集することが決まりました。

その他として、会員の参加拡大について、建築グループ、他大学などについては、引き続き検討して行くこと、コンクリートなど建設材料関係について、今話題になっているコールドジョイントに関する講習会を茨城大学で企画したいとの提案などがありました。

・その他の打ち合わせとしまして、4月20日(火)に分科会(新全総部会)、5月20日(木)に分科会(橋梁部会)、6月22日(火)に事業班の各打ち合わせを実施しております。

(事業活動に関するアンケートの実施結果について)...事業班

・昨年、会員の皆様に、見学会や講習会・講演会などに対するアンケートを実施いたしましたので、その結果の概要について報告いたします。回答者は、148名で回答率は、約26%でした。なおアンケート結果は、複数回答になっております。

・講演会につきましては、回答は数が、170件で多岐にわたってありましたが、次の三つが代表的なものでした。

技術面(県内の地形・地質・断層とその解析法および地震対策、土木技術の最近の動向と話題について)89件、52%

行政面(新全総における茨城新プロジェクト構想と施行上の問題点、公共調達システムの現状と今後の展望、茨城県の河川災害と今後の整備計画)58件、34%

歴史遺産と土木技術(県内土木建築遺産と古代の土木技術、県内の土木工事の歴史)13件、8%  
その他として10件で6%でした。

講演の時間につきましては、1講演1時間として3講演とする方が131件と85%を占めました。

・講習会の内容につきましては、次の通りです。

- |          |         |      |     |
|----------|---------|------|-----|
| 1. 希望分野: | 技術面     | 163件 | 69% |
|          | 環境公害    | 43件  | 18% |
|          | 一般常識    | 22件  | 9%  |
|          | 資格      | 5件   | 2%  |
|          | その他     | 2件   | 1%  |
| 2. 方式:   | 講義+ゼミ方式 | 73件  | 51% |
|          | 講義方式    | 64件  | 45% |

ゼミ方式 5件 4%

3. 講習時間: 半日 95件 66%

1日 43件 30%

2日 5件 3%

その他 1件 1%

・見学会の希望につきましては、次の通りです。

1. 希望箇所: 工事現場 216件 82%

既設構造物 36件 14%

建設遺産 11件 4%

2. 行き先: 関東圏内 95件 74%

県内 32件 25%

その他 2件 2%

3. 日数: 日帰り 90件 66%

1泊2日 45件 33%

その他 1件 1%

4. 負担額: 5千円以内 64件 59%

1万円以内 40件 37%

無料 4件 4%

その他(実費) 1件 1%

5. 実施時期: (春期) 4月中 11件 10%

5月中 54件 48%

6月中 48件 42%

(秋期) 9月中 14件 12%

10月中 64件 53%

11月中 38件 31%

その他 5件 4%

・以上の結果を参考にして、事業班では、平成11年度の事業計画を進めることとしておりますが、今後とも会員の皆様の要望等を的確に把握して事業の推進に当たりたいと考えております。

(お知らせ)...事業班

・常陸那珂港および小山ダムの現地見学会の実施を10月22(金)に予定しております。見学場所は、午前中は常陸那珂港、午後は五浦美術館、小山ダムの本体工事と骨材製造工事の現場を見学する予定です。詳細日程と参加募集につきましては、別途案内いたしますので、見学を希望される会員の方は積極的な参加を御願いたします。(バス2台、定員80名程度)

・特別講演会を10月27日(水)、開発公社の会議室で開催する予定です。演題は、最近話題のトンネルのコールドジョイントの問題や構造物の維持補修を中心に茨城大学や鉄道総合技術研究所、ショーポンドに講師を依頼しております。詳細は別途御案内いたします。

・第1回ワ - クショップ(講習会)を11月5日(金)、建設技術研修センター(水戸市青柳)で計画しております。まず「新全総」部門について、専門の講師をコ - ディネ - タ - としてお招きするか、分科会班において発表・討論を行いたいと考えております。第2回以降は、「GIS」、「都市環境と植物」

などを予定しています。なお詳細につきましては、後ほど皆様に御案内を差し上げる予定です。

## ・第2会ワ - クシヨツプ

2月位に、平成11年度の成果を踏まえ、発表会・討論会を開催したいと考えております。

3. 今回は、特に各グル - プに自由テーマで寄稿文を依頼しました。

## 「中心市街地活性化 / 世界の都市の取り組み」 都市計画グループ 高野 賢 シンガポール

シンガポールは小さな都市国家であるが、世界の中で最も充実したコンベンション都市の1つである。世界各国から多くの人々が集まる。地域資源(観光等)がけっして豊富でない都市であるが、都市の売り方がうまい。欧米に対しては、オリエンタルと多民族性と言うことで、シンガポールの魅力をアピールしている。一方、日本に対しては、オリエンタルだといっても同じ東洋人なので受けない。そこで、多民族性は若干言ってはいるが、リゾート・ショッピングをアピールし、日本人を集めている。コンベンションに関しては、会議・展示会等はシンガポールで行うが、アフターコンベンション(観光・レジャー)は周辺諸国(マレーシア、インドネシア等)の観光・レジャー資源をうまく位置付け、活用している。

### リバプール(イギリス)

リバプールは港町である。ビートルズの生まれたまちでもある。まちなかの広々とした歩行者専用のモールの姿は、他のイギリスの都市と同じようにあるが、ウォーターフロント再開発地区内にビートルズストーリー(博物館)がある。小さな施設ではあるが、今まで見た博物館の中でも最も密度の濃い時間を過ごし、かつ感動を覚えた施設であった。作り手の真摯な姿勢、メッセージが感じられる。本物のレベルである。ジョンレノンの「イマジンの部屋」は感動的であった。このような施設を県内の中心市街地において作るべきである。

### バーミンガム(イギリス)

バーミンガム市の都市の姿から、都市のマーチャンドライジング(都市商品化政策)のあり方が見えてくる。それは、歴史遺産の掘り起こし、スポーツ機能の充実(特にプロスポーツ)、芸術の充実(美術、演劇、音楽等)、飲食機能の充実(ローカルな味、世界の味)、夜型エンターテイメント機能の充実、買い回り型ショッピング機能の充実(郊外大型店にはない楽しい商業環境)、周辺地域を巻き込んだ観光機能の充実、コンベンション機能の充実(会議、展示会等)、交通機能の充実(マストラ交通機関、歩行系モール等)、宿泊機能の充実等である。これからの都市づくりにおいて、従来からの住民をターゲットとした管理型の都市政策の充実と共に、交流者(その都市に様々な目的で訪れる人々)をターゲットとした、都市マーケティング、都市マーチャンドライジングを明確にした上での、創造的な都市づくりが大切となってくる。このことは、都市経済の活性化の視点からも重要なことである。また、中心市街地においては、それらのマーケティング、マーチャンドライジング政策を受け入れられる、ハード、ソフト、ハート面に渡る基盤を整えて行かなくてはならない。現に、バーミンガム市の中心市街地の姿はそのようになっている。今まで車が走っていた道路を、広々とした歩行者用モールにし、そのモー

ル沿道には、商店街、美術館、博物館、コンサートホール、コンベンションセンター、観光施設、レストラン等、人々を集める仕掛けと施設が集積している。郊外部では対応不可能な、中心市街地でしか作り得ない姿である。

#### ラスベガス、オーランド(アメリカ)

近年、世界で最も成長が著しく、変化のある都市は、アメリカのラスベガスとオーランドである。アミューズメント施設、商業施設、コンベンション施設、ホテルがどんどん建てられている。ラスベガスに関して言うと、人口が1985年には58万人だったのが、95年には104万人になった。わずか10年間で50万人増えた。今、観光客の入り込みは年間約3,000万人と言われており、ここ10年間で年間約1,000万人増えた。ホテルは、年々増えているが、平均稼働率が90%以上である。そして、ラスベガスに学ぶということで一番熱心に行っている都市が、オーランドである。ディズニーワールドのある都市である。様々なテーマパークがあり、またハイテク企業も数多く立地している。ニューヨークでのリタイア組は、オーランドに住み着く。人口も年々増えている。オーランドはラスベガスに学んで成長していった。逆にオーランドが伸びると、今度はラスベガスがオーランドに学び成長していった。互いの競合の中で、ラスベガスとオーランドは成長している。両都市とも共通している点がある。それは、オープンであり、ホスピタリティーがあると言う点である。また、小さな地域マーケットでなく、全世界をマーケットの対象として、集客を考えている。マーケティングのターゲットが明確である。

#### ミネアポリス(アメリカ)

アメリカ北部のミネアポリス市の中心市街地には、ユニークな交通システムがある。それは、「ニコレットモール」と「スカイウェー」である。ニコレットモールは、トランジットモールである。トランジットモールとは、歩行者と公共交通機関のみが通行できる道路空間のことである。ニコレットモールの場合、バスのみが公共交通機関として通行している。広々とした道路空間、そして細やかに統一的にデザインされた街具(街路灯、案内板、ベンチ、モニュメント等)などにより、中心市街地のイメージを高めている。スカイウェーは、2階レベルでの歩行者ネットワークである。中心市街地の建物が、2階レベルでつながっている。歩行者は地上の歩道と、2階レベルのスカイウェーと、2つの歩行系空間を利用することができる。冬に訪れたせいもあるが、大半の人々がスカイウェーを歩いていた。ミネアポリス市の冬は大変寒い。毎日が氷点下の世界である。スカイウェーがあることにより、寒い外に出なくて中心市街地を楽に移動できる。「人に優しい交通システム」である。そして、スカイウェーのルートは店舗内の通路もそのルートとして活用している。利用者はスカイウェーを歩きながらショッピングも楽しむことができる。移動性の確保と、商業振興を同時に兼ね備えた、大変優れた交通システムである。ミネアポリス市では、中心市街地活性化に対して、交通システムだけでなく、様々な対応を行っている。それは、コンベンション施設、コンベンション誘致のビューロー活動、中心市街地の文化的求心力アップのための芸術振興、ユーザーを基本とした施設整備、教育・スポーツ振興等である。

#### カーメル(アメリカ)

アメリカの小さなまち「カーメル」。かつて、映画俳優のクリント・イーストウッドが市長を務めたまちである。茨城県で言えば、人口が1万人以下の、町あるいは村の規模である。しかし、極めて魅力的なまちであり、全米から、世界から観光客を集めている。カーメルのまち自体は、これと言った観光資源を持っていない。あるのは、こじんまりとした、中心市街地の商店街である。そして、その商店街の密度

が濃い。密度が濃いとは、高層建築を建てる高密度な土地利用を行っていることではない。大半が2階建ての建物のまちであるが、「魅力」の密度が濃いのである。国内の長浜市・黒壁と似たような感じを与えるまちである。商店街には、ファーストフードのチェーン店の姿は見当たらない。カメルルの中心市街地は小さく、ただ見て歩くだけなら、短時間で見て回れるまちである。しかし、まちの密度が濃い故に、足も心もスローペースになり、ゆったりとした気持ちになる。実に、居心地の良いまちである。なぜこのような気持ちになるのかと思い、よくまちウォッチングしてみた。そこにあったまちの姿はこうである。まち全体の景観コントロール、徹底的に管理され心のこもった「花と緑」、個々の建物の個性化、質の高い店舗、ホスピタリティー等である。まち全体でコントロールすべきところは厳しくコントロールし、各店で個性を出すところは徹底して個性化を図っているのである。市民のそして商店街の、まちに対する愛情と心意気が伝わってくる。小さなまちであるが故にできる、まちづくりの姿である。

### サンディエゴ (アメリカ)

サンディエゴには、中心市街地での新たな商業再開発で世界的に有名な、ホートン・プラザがある。福岡のキャナルシティーの原形となった、ショッピングセンターである。そして、その周辺には商店街であるガスランプ・クォーターがあり、ここでは、衰退化した商店街の活性化に取り組んでいる。ホートン・プラザもガスランプ・クォーターも中心市街地、アメリカ流に言えばダウントウンにおける活性化の取り組みを行っているところである。アメリカにおいても、中心市街地の活性化は大きな社会問題である、各都市において積極的に取り組んでいる。ホートン・プラザというユニークな大規模商業再開発と、周辺の商店街再構築。このサンディエゴでのダウントウン再生の取り組みは、1つの方向性を指示している。集客機能整備(商業系、アミューズメント系、観光系、文化系)と歩行系回遊ネットワーク整備は、今後の中心市街地活性化の方向性である。

---

地質調査グループ 常磐地下工業株式会社 鈴木智浩(26歳)

### ~地質調査への思い~

土木業界の門をくぐり、はや5年目。大学当時、物理学を専攻していた私にとっては大きな転身でした。その後、設計業界からこの地質調査業界に移り様々な問題に試行錯誤、一喜一憂の日々です。今では車を運転していても、自転車に乗っていても露頭を見つけるとついつい見入ってしまう程の「土人」ぶりです。最も、まだまだ半人前で「頭でっかち尻つぼみ」にも満たない、「頭小さく尻でっかち」という程度ですが…。今回は取り留めのない文章ですが、業界の紹介という意味も込めて地質調査に対する私の思いを綴りたいと思います。

地質調査は地盤を調査する事と言ってしまうとそれまでですが、その調査項目は弾性波やサウンディングから載荷試験など現在は多岐に渡ります。ただし、その代表格といえやはり調査ボーリングです。地質調査は主にこの調査ボーリングを実施する事により地質状況を把握、設計用の資料を作成する事が主とする業務です。測量と共に設計の前段階に相当するものですが、調査する場所は人目にさらされない地下で、調査後の現場には何も残らないことから、あまり目立つ仕事とは言えません。唯一脚光を浴びるときは地滑りや液状化、土石流などの災害が起こった後ぐらいでしょうか。ですから我々土質調査が黒子に徹する事が出来ていれば、何も問題が起こらないという意味で良い事と言えるでしょう。



また、地質調査はとかく設計や施工と比較すると軽んじられがちです。しかし、「縁の下の力持ち」ではないですが、目に見えない部分だけに比較的その重要性は高い様に思われます。より詳細に調査することより必要十分条件を満たした適材適所なモノができ上がるのではないのでしょうか？公共事業に関する世間の目が厳しくなり、過大設計が問題となっている今日においては十分な事前調査こそ必要とされるのではないかと思われます。安全側という言葉をよく耳にしますが、どこまでが安全側でどこからが過大となるのか？その境界をなるべく明確に定める為には、十分な事前調査が要である様に思います。

最後に、地質調査の醍醐味も千差万別だと思いますが、私を含む大勢の地質屋さんは次のように考えています(と思います。)。地質調査の醍醐味、それは「土質はいくらたくさんの既往資料に埋もれていても掘ってみなければ正確には分からない。」という事につきます。見かけは何もない真っ平らな水田地帯、でも掘ってみると地下は非常に変化に富んでいることが分かります。水田地帯の下に谷が埋もれている(谷底平野)など、この業界の人間でもない限り様に想像できないのではないのでしょうか？この堆積状況を「推定」すること、それは設計の「理詰め」と違い、パズルゲームを解くのと似たような所があります。このパズルを解こうとするとき、「設計用の資料の為に」という意識や利益の追求からは離れ、仕事の為ではなくそこにあるのは探求心です。その時、地質技術者は過去の時代に思いを馳せる時の旅人です。そういう点では考古学に一面も地質調査にはある様に思います。掘るべき穴は一つでも答えは無限！などと言うと聞こえはいいですが、真実の一つでありこの真実を自分なりに推理する事こそ地質調査の醍醐味だと私は考えます。

---

## 建設コンサルタントグループの紹介

建設コンサルタントグループ(株)長大 牧野 均

建設コンサルタントという職業は、産業標準分類によれば、土木建築サービス業に分類されている。建物設計製図業いわゆる建築設計事務所と同類となっている。また、一般に建設コンサルタント、測量業及び地質調査業を建設関連業といっている。

建設コンサルタントの公的定義は、請負もしくは受託により土木建築に関する工事の調査、企画、立案、助言、設計もしくは監理を行うものとしている。また、ここで我々が所属する(社)建設コンサルタント協会では建設コンサルタントを次の様に定義している。

「建設コンサルタントは、一般に個人または法人が企業として発注者の要請に応じ、発注者の立場に立って、

その意図に沿い、自己の専門的応用能力を駆使して発注者の期待に応え、必要な対価として適正な報酬を得、もって以下の建設コンサルタント業務を行うことを使命とする者である。

建設コンサルタント業務；

建設に対する相談、助言、勧告など。建設プロジェクトの企画、立案、及びその投資前調査。建設プロジェクトの工事のための計画、設計及びこれらに必要な調査、入札契約に必要な図書の整備、施工管理、建造物の維持管理及びその運営の指導など。」

### 建設コンサルタントの歴史

#### (1)胎動

戦後、政府の土木関係機関において、連合国軍の設営指令や国土復興の施策のため、業務量は膨大となりつつあるとともに、民間企業の設備整備の必要も緊急を要するものが多く、外部の土木技術者が必要とされた。このため、朝鮮、中国などからの引き揚げ技術者を中心に、1946年(昭和21年)6月に鉄道関係に社団法人復興建設技術協会、水力発電関係に日本工営株式会社などが設立され、測量、調査、設計、計算、製図などの業務を受注した。これに前後して1945年(昭和20年)財団法人建設技術研究所が土木技術の研究を目的に設立され、1951年(昭和26年)には米人コンサルタントと提携してパシフィックコンサルタンツ株式会社が設立されている。

## (2) 確立

1951年(昭和26年)に日本技術士会が設立され、技術士法の立案を企画し、1954年(昭和29年)3月、同法案が国会に提出され、1957年(昭和32年)5月成立した。

これにより、日本技術士会は建設コンサルタント業務の性格と契約、報酬決定のあり分、建設コンサルタントの中立、独立性が明確にされた。

土木学会においては、1958年(昭和33年)に基準を作成公表し、この基準が建設コンサルタントの業務ならびにこれに対する報酬算定の基となった。

建設省は、「土木事業に係わる設計業務などを委託する場合の契約方式等について」とする1959年(昭和34年)地建局長あての事務次官通達をもって、建設省直轄の土木事業にかかわる調査、計画及び設計の業務を外注する場合の取り扱いを定めた。

以上の様な制度、基準等で建設コンサルタントは次第に増えて、1960年(昭和35年)頃には全国で70を超えた。

## (3) 創設及び発展

建設省は1963年(昭和38年)に建設コンサルタントの育成方策について、中央建設業審議会に諮問した。同審議会は建設コンサルタント小委員を設置し、同年9月に答申が行われた。この答申に基づいて建設省は、1964年(昭和39年)「建設コンサルタント登録規定」を告示して、即日実施された。

この登録制度の創設と契機に建設コンサルタントは公共事業の拡大とあいまって業務量、企業数ともに飛躍的な発展を遂げた。

建設コンサルタント業務の発注機関は、建設省及び関係機関のほかに農水省、運輸省などのほかの省庁及びその関係機関、市町村ならびに鉄道、電力などの民間があり、国内市場総額は1990年(平成2年)度では1兆1000億円～1兆3000億円程度と推定される。また、建設コンサルタント登録企業数は1990年(平成2年)度には2200社程度となっている。

## 建設コンサルタントグループ

現在、建設コンサルタント業に登録している企業数は上記に表す様な数となっている。その中で、我々が所属する社団法人建設コンサルタント協会は平成10年では約500社が加入しており、協会として様々な活動をしている。(社)建設コンサルタント協会は、全国に9つの支部(北海道支部、東北支部、関東支部、北陸支部、中部支部、近畿支部、中国支部、四国支部、九州支部)をもち、その中でいろいろな部会、委員会等を受け、建設コンサルタント業務の改善と建設技術及び事業の進歩発展に関与するとともに、会員相互の親睦を図ることを目的としている。

茨城建設技術研究会の運営委員は、主に建コン協会関東支部内の対外活動部会の茨城地区のメンバーから構成されており、約6名の方が活動している。また、入会登録の企業数は19社となっている。参加メンバーは主に東京勤務が多く、各々の活動に対し、必ずしも満足できるものとは言えませんが、この会の発展のために役立つ様努力するつもりであります。どうか宜しくお願い申し上げます。

## 「帰省雑感」

自治体グル-ブ 北郷新平

突然、事務局の方から広報誌に掲載する寄稿文をどうかとの話があり、私自身は、「いばらき建設技術研究会」の会員ではないのですが、会長の山形先生には、大変お世話になっていることでもあるし、断るのは不味いのかなどと逡巡しましたが、このお話があるちょっと前に夏休みを取って札幌に帰省し、その際道北(北海道の北部の意)迄足を延ばしまして、その際の交通手段は、立場上(現在の私の職場は、高速道路対策室)からも非常にマッチして高速道路をフルに活用してのマイカ-でしたので、その時の模様を書くことにして寄稿文に代えたいと思います。

まず、常磐道~磐越道~東北道を乗り継いで、青森迄行きます。運転は、ほとんど私一人で行い、真夜中の運転(青森発a.m.10:00のフェリ-に乗るため、及び貧乏帰省の故途中一泊をしないことから)となるため、最もハ-ドな区間です。岩間ICから常磐道に入り、いよいよ苦難の道のスタートです。日立のトンネル群を抜け福島県に入ると、突如としてタイヤ音が非常に大きくなります。

これは、アスファルト舗装からコンクリ-ト舗装に変わったからですが、かつて、JHの人にその訳を聞いたところ、「この付近は、かつて大きな炭鉱地帯であって、坑道が縦横無尽に掘られている。それで陥没防止のため剛性舗装のコンクリ-トとした」という返事でした。更に「コンクリ-ト舗装でも、通常のそれと較べて、曲げ抵抗を強化すべく、鉄筋をより多く使用している」とのことでした。

磐越道に入りますと、片側一車線の対面通行(中央分離のためポストコ-ンが林立)となり、非常に走りにくい道路(高速道路とはとてもいえない!)となります。但し、この道は、四車線の工事が進められています。因みに、北関東道は、最初から四車線の完成断面で建設が進められています。

一時間ほどで磐越道と別れ、郡山JCT東北道に乗り、一路青森を目指します。サキイカをかじりながら(アゴを動かしていると脳神経が刺激されて眠気対策になるそうです)睡魔と闘っているうちに、碓ヶ関ICを通過するとまもなく青森です。この碓ヶ関あたりは、私の記憶では、東北道の完成を最後まで拒んでいた所です。地形的には奥羽山脈から白神山地が派生するあたりですが、難工事だったのでしょう。青森~函館間のフェリ-に乗っている約4時間は、運転者にとって貴重な睡眠時間帯です。

函館からはまず国道5号を北上します。車窓から右に駒ヶ岳を眺めながら、しばらく走るとカニ弁当(これは旨いです。丁度1,000円)で特に有名な長万部に着きます。ここからは、高速道路(北海道縦貫自動車道)が札幌まで通じています。函館~長万部間のそれは、現在工事中です。札幌から稚内に向かっては、旭川迄高速道路を利用し、そこからは、一般道を使うこととなります。この高速道路と平行して国道12号が走っていますが、この国道は、直線区間の延長が日本一ということでも有名です。また、旭川の手前に砂川という市があり、そこに高速道路の関係者には、見過ごすことの出来ない砂川SAと直結した砂川ハイウェイオアシスがあります。何故か先を急ぐ私は、横目でにらみつつ通過します。旭川からは一般国道40号です。交通量は僅少にして、道路線形及び幅員は、ユツタリ、従って必然的にスピ-ドアップとなります。気を付けなければ...

北海道は事故が多いのです。稚内に近づいて、広漠としたサロベツ原野に入るとサロベツ原生花園というさわやかなところを通りますが、ここには、遊歩道などが整備されて、沢山の観光客が楽しんでいます。又、ここからは、深田百名山の一つ利尻富士の秀麗な姿を見ることが出来ました。とはいえ、この原野は、いわゆる泥炭層から出来ておりまして、泥炭といえば、その恐るべき軟弱さの故に、特に北海道の土木技術者に忌み嫌われているシロモノです。

ということで無事稚内に着きました。翌日、日本最北端の地、宗谷岬に行きましたが、残念ながらカラフトは見えませんでした。又、このすぐ近くに、本県伊奈町の出身である間宮林蔵のカラフト渡航を記念する碑がありました。

以上岩間から稚内までの道中を記しましたが、機会があればこの続きを書くことにして、とりあえずこの辺で筆をおろすことにしたいと思います。

---

## 「オーケストラ」

株式会社 明和技術コンサルタンツ 山下 泉

私は、大学生の頃からオーケストラでヴァイオリンを弾いています。ピアノは、6歳の頃から習っていたので、音符には小さい頃から親しんできていました。ヴァイオリンは大学に入って、ほぼ初心者に近い状態で始めました。最初の1年間は借り物のヴァイオリンを使っていましたが、2年目からは自分で買ったもの(1年間のバイトで貯めたお金と親からの援助による)を使うようになりました。自分の楽器を持つことにより、より練習に励むようになり、ますますオーケストラにのめり込んでいきました。

また、2年の夏には、大学のオーケストラだけでなく、つくばにある市民オーケストラ(社会人中心)にも入り、

2つのかけもちでやっていきました。今もその状態は続いています。つくばのオケ(オーケストラ)は、そのほとんどが社会人であり、場所柄研究職の人が多く、大学の先生もいます。そのせいか会話も専門用語が多発し、なかなかマニアックな話になったりとしています。

今、マーラーの交響曲第5番を練習しています。これは、クラシックファンの人なら解るかもしれませんが、かなりの大曲であり、大変難しいのでなかなかアマチュアオケでは手を出しません。練習をしないとなかなか弾けない曲なので、日頃の練習が大切になってきます。私は、平日は練習をするのが難しいので、休日を利用して練習しています。最近は、サイレントヴァイオリンといって、音がほとんど出ず、ヘッドホンで聴きながら弾けるものが出ており、夜のアパートでも安心して練習出来るようになってきました。そのうちそれを手に入れて、もっと練習をしたいと思っています。

演奏会は、1つの団体で年に2回あり、私は2つの団体に参加しているので、年に4回の演奏会をこなしています。演奏会はだいたい2時間ほどですが、かなり疲れます。座って弾いているのだからそんなに疲れないだろうと思うかもしれませんが、本当に疲れます。ですから、本番前には栄養ドリンクを飲む人もいます。演奏後、体力を使いすぎて足がガクガクいったこともあり、私も、曲によっては飲んでます。演奏が終わり、お客さんから拍手をもらうときは本当にうれしく、特に「ブラボー！」という声が聞こえてきたときは、本当にうれしいです。ああ、やってよかったと心から思います。あの感動はオケをやみつきにさせます。

オケをやっている人たちはみんな真面目ではないかと思っているかもしれませんが、実際は全然違います。

かなりの個性的キャラクターの集まりです。いつもハイテンションで、お酒が入っていないのに外から見ると、

まるでお酒が入っているかのようで、一緒にいるとかなりすごく、疲れます。また、発想もすごくおもしろく、いつも笑いが絶えず、私が本当に自然体になれるところの一つでもあります。クラシックは、オケをやり始めてからよく聴くようになったのですが、今では最もよく聴くジャンルでもあり、心を落ち着かせたり、リラックスしたいときによく聴いています。しかし、オケをやっているからといって、クラシックだけやっているわけではなく、他のジャンルもやります。本当にみんな音楽が好きで、音楽の話になると熱く語り、夢中になります。

オケをきっかけにいろいろな人たちと知り合うことができました。普段の生活ではきっと知り合うことがないだろうと思う人たちとも、音楽を通じてたくさん知り合い、また、そこから輪が広がっていきます。大学時代のサークルですら100人近くの団員がおり、一気にたくさんの人と知り合うことが出来ました。このサークルに入ったことで、充実した大学生活が送れました。そして、社会人になった今でも音楽をやり続けていることで、充実した生活を送ることが出来ていると思います。ストレスの解消にも役立っているように思われるので、今の私には必要なものでもあります。私は、これだけのめり込めるものを見つけられて本当によかったと思っています。今後も、仕事とうまく両立させて続けていきたいです。

---

## 『ISO9000s(品質管理及び品質保証規格)導入の背景について』

茨城コンサルタントG 国土建設コンサルタント株式会社

設計部設計課 横田

この度、いばらき建設技術研究会発行の広報誌に我が駄文を寄稿させて戴くことと相成り、身に余る光栄を感じると共に多少の不安が頭を過っている。1800字にも上る膨大な量の記述を行え得る題材を選定することはなかなかの難事業であり、本業の合間に為さねばならないという時間的制約も存在し、私にとって当に身に余る課題の様に思われたからだ。仮に1800字の原稿が日の目を見るとしても或程度の鑑賞に耐え得る内容であり、多少なりとも有益な示唆を内在するものでなくては寄稿させて戴く私自身の責任を全うしたことになるのではないだろうか？

私は上述の不安を抱きつつもあれこれと思索を巡らし、タイトルにある様にISO9000s(品質管理及び品質保証規格)にその題材を求めることとした。いばらき建設技術研究会に所属する『茨城県建設コンサルタント業研究会』という団体のISO9000s部会に籍を置いてISO9000sの勉強会に昨年より参加している経緯があり、私にとって打ってつけの題材だと考えたからである。

以下、ISO9000s(このsはseriesのs。9000~9004までであるからだ。)に関する私の浅薄な知識、私見等を読者諸氏に披露させて戴くことにしよう。特にISO9000sの導入に至る背景については非常に興味をそそられたのでこのことを中心に記述したいと思う。何分駄文にして多少の誤字、脱字はあるかもしれないが読者諸氏の寛大な心を以て御容赦願う次第である。

ここ2~3年で急速に雑誌、新聞、TVコマーシャル等でISOという文字を頻繁に目にするに至り言葉だけならかなり多くの人々が認識していると思うが、その内容に精通している人はまだ依然として少ないと思う。斯く言う私もその様な人間の一人であり、現時点においても然程理解が深まっている訳ではない。

ISOとは国際標準化機構(International Organization for Standardization)のことで国際的に通用する製品、用語、方法等の規格の標準化を推進し、その関連活動の発展、促進を図ることを目的に設立された非政府国際機関でその本部はスイスのジュネーブに存在する。現在、世界の120ヶ国以上が加盟しており、日本は昭和27年に通産省工業技術院に設置されている日本工業標準調査会

が加盟している。ISO 9000sはISOの定めた数々の国際規格の中の一つであり、品質管理及び品質保証に関する規格で欧州諸国の規格の中で一番優れていた英国のBS規格をベースに造られたものである。日本ではJIS(日本工業規格)があり、米国の品質管理システムQC(Quality Control)を手本に独自に開発したTQC(Total Quality Control)という世界に冠たる優れた品質管理システムがあり、今更ISO 9000sを導入する必要はなかった。米国ではこのTQC(米国ではTQMと称されている。MはManagementを表す。日本でも最近TQMに名称が改められている。)を採用し、没落した米国の三大自動車メーカー(フォード、GM、クライスラー)はこれにより息を吹き返したのである。日本の「東洋の奇跡」とも称された高度経済成長を支え経済大国に押し上げた立て役者であり、没落した米国三大自動車メーカーに再び命を与えたTQMに取って替わる新たな品質管理システムがこの上必要であろうはずはなかったのである。しかし、現実問題としてTQMに取って替わる新しい品質管理システムが必要でありその品質管理システムはISO 9000sの国際規格を満足するものでなくてはならなかったのだ。ここには多分に政治的色彩の強い要因が関係しており、決してTQMにシステムとして欠陥が存在した訳ではなかった。

80年代後半から90年代初めの日本はバブル経済全盛で国民全体がバブル経済という麻薬に酔っていた時代だった。財テク(不動産投資、株式投資etc.)をしない経営者は無能と呼ばれ、猫も杓子もブランド品(シャネル、ルイビトン、グッチetc.)を買い漁り、若者(自分の経済基盤を有しない者)が高級外車を乗り回し、空前のグルメブームの下、料理に対し長々と取るに足らない蘊蓄を披露することに終始した時代だった。世界経済は米国経済と日本経済に席卷されており、欧州諸国はこの現状に強い危機感を抱いていた。このままでは欧州市場は米国、日本の2大経済圏に飲み込まれてしまい、欧州諸国の経済力は衰弱し、延いては政治的発言力に影を落とすことになりかねないという危機意識が欧州各国首脳にはあった。また欧州は階級社会であり、先のブランド品などは極一部の上流階級のみが所有するという暗黙の了解が社会の中に存在しており、極東の小さな島国、近代化してここ百数十年しか経っていない新興国の日本の人々(戦後民主主義による平等意識に根ざした一億総中流意識をもつ人々)が我々の国にのこのことやってきてブランド品を買い漁ることはどうにも我慢ならなという大衆感情(人間誰もが持っているネガティブな感情である嫉妬)が充満していた。欧州諸国は一致団結して92年にEU(欧州連合)を発足させ政治のみならず経済の統一を図り、米国、日本の2大経済圏に対抗する姿勢を示した。

EU(欧州連合)が米国、日本の2大経済勢力に対抗すべく念頭に置いた戦略として、欧州市場の防衛と、世界市場において有利に経済活動を展開するという2つ側面があったように思われる。欧州市場防衛の側面而言えば、欧州市場に参入する為の必須条件としてISO 9000sの認証取得を設けたことであり、世界市場において有利に経済活動を展開するという側面から言えば、ミスターアメリカと称される米国を代表するコンピュータ関連企業IBMに対し、欧州市場に参入の条件としてISO 9000sの認証取得を持ちかけ、IBMの認証取得効果による米国企業全般にわたるISO 9000s認証取得の浸透を図り、更なる波及効果として東南アジア諸国、日本へのISO 9000s認証取得の浸透を図ったことである。ずばりその目論見はもの見事に成功を収め品質管理及び品質保証の規格としてISO 9000sは今流行の世界標準(Global Standard)の地位を確立するに至るのである。昭和54年のGATT(WTO:世界貿易機構の前身)東京ラウンドにおいて「貿易と技術的障害に関する協定」が合意され、各国が国内規格を制定する場合には、ISOやIEC(国際電気標準化会議:International Electrotechnical Commission)の定めた国際規格に準拠する責任と義務を負うこととなった訳だが、この時既に先の目論見の下準備が為されていたのではないだろうか？

翻って我が国日本について考えてみた時、ISO9000s認証取得に関しては完全に世界に遅れをとることとなってしまった。先に書いたように日本は昭和27年に通産省工業技術院に設置されている日本工業標準調査会がISOに加盟しているにも拘らず遅れをとることとなってしまったのである。原因として、日本にはこれまた先に述べたTQMという優れた品質管理システムがあり、ISO9000sなどには目もくれない状況にあり、政治家、官僚に時代を読む力量が些か不足していたことによる所が大きいだろう。日本に欧州の様な老獪な政治力があれば、事に依るとTQMもしくはTQMの改良バージョンが品質管理及び品質保証の規格としてGlobal Standardの地位を獲得しISO9000sに取って替わる事態も有り得たかもしれないのだ。良いものが必ずしも生き残るとは限らず、ISO9000sとTQMのケースでは正しく政治力がその明暗を分けたと言えるだろう。つくづく政治とは大事なものだと思感させられる。

まだ書き足りないのだが最初に危惧していた1800字の字数を大幅に超える結果となってしまった。当初の不安の一部は要らぬ老婆心と言えるものだったらしい。本当はさらに、我々が営む建設コンサルタント業とISO9000sとの関係、ISO9000sの認証登録制度等について少々述べるつもりだったが…。何はともあれこれで終わりにしたいと思う。内容の出来については読者諸氏が各自御判断して戴きたい。最後まで我が駄文に御付き合い戴き心より御礼申し上げます。

---

## 「茨城大学・工学部・都市システム工学科の紹介」

大学Gとして当研究会に参加しているのは、現在のところ茨城大学工学部都市システム工学科ですが、研究会が産官学(民間企業・自治体・大学)の三方にとってよりよい研究・交流の場となりますように学科スタッフ一同微力ながらお手伝いさせて頂きたいと思いをします。

我が都市システム工学科は、安全で快適なまちづくりへの提言と、将来の社会を支えるシビルエンジニアの育成を目的に、研究・教育活動を行っています。

学科には、9つの研究室があり、それぞれの研究分野に分かれて活動しております。このコラムでは、学科の若手教官の回り持ちで各研究室の紹介をしたいと思います。研究室のスタッフ、研究内容などの“固い”話だけでなく、研究以外の“柔かい”話も積極的に紹介したいと思います。会員の皆様に我が学科の研究室活動の一端でもご理解頂ければと存じます。

本号では、研究会運営委員の横木(総務班)と桑原(広報班)がそれぞれ所属している水圏環境研究室と施設制御研究室をご紹介します。

### < 水圏環境研究室 >

水圏環境研究室は、教官3名(教授:三村信男、助教授:神子直之、助教授:横木裕宗)、学生20名、合計23名で研究を進めています。研究の内容は、地球・地域環境問題、沿岸環境の実験的解析および水質の分析等幅広く、原理を深く探求・理解し、応用する研究体制を取っています。実験・解析装置は充実しており、地理情報解析システム、大規模造波装置さらに最新の水質分析機器を有しています。研究は、担当教官と学生との密な個人ゼミで進行します。研究成果は、国際学会や環境関連の諸著書・刊行物に多用されており、かつ積極的に学会に発表・投稿しています。主として、(社)土木学会、(社)環境学会に審査論文や講演概要集を投稿しています。また、夏期にはゼミ旅行を行い、年毎に設定した課題に対する集中勉強会、公開ゼミも行っています。

## < 施設制御研究室 >

施設制御研究室は、教官2名(教授:野北舜介、助手:桑原祐史)、技術官1名(木村亨)、学生10名、合計13名で毎日の研究を進めています。研究の内容は、実験からコンピュータシステム開発まで幅広く、目的対応の研究体制を取っています。実験装置や地理情報・衛星データの解析システムは、できるだけ自分で作る、ということを経験の方針にしています。机に座って考えることに加えて、自分の手足を動かし、物を作ることによって、創造力や実行力を身につけてくれれば、そんな思いが我々にはあります。そして、一年を通じてまとめた研究成果は、積極的に学会に発表・投稿することを心がけています。主として、(社)土木学会、(社)環境情報科学および環境システム計測制御学会に審査論文や講演概要集を投稿しています。また、夏期には中間報告を兼ねたバーベキュー大会や、コンクリートカー大会も行っています。

---

## 公共事業と(社)茨城県建設業協会の役割

建設グループ

21世紀まで、後1年余りとなりました。

我が国は、終戦後の荒廃した国土から血のにじむ勤労と努力を重ね、奇跡とも思われる経済の高度成長を実現し、戦後50年を経て「世界の日本」にまで繁栄がもたらされるに至りました。

その基は言うまでもなく公共投資、公共事業の積極的活用であり、特にその担い手である建設産業界の果たした役割はきわめて大なるものであります。

公共投資は、我々が日々生活をするため、そして活動し生産するための基盤である道路・街路・橋梁・空港など陸海空の交通施設、住宅・上下水道・公園などの住環境、教育施設、水資源開発、土地改良などの拡充をもたらし、「潤いと豊かさ」の実感できる社会の創造をはかるものであり、公共事業が単に景気の調整弁ではなく国勢の基幹となるべきものであります。従って、欧米諸国に比べて立ち遅れている社会資本整備のための将来展望に立ち、長期的・計画的公共投資・公共事業は不可欠であり、このことなくして「物の豊かさ」、「心の豊かさ」は確保できません。

今後、我が国は急激な速度で少子・高齢化が進行して行きます。このことは、労働生産人口、労働生産性の低下をもたらすものであります。従って高齢者に即した、快適にして安心して生活できる社会環境の整備は急務であります。

洪水や地震などにも心配のいらぬ国土建設が希求されております。

その実現のための公共投資・公共事業の位置づけを理解し拡大・充実することは当然のこととされます。

社団法人茨城県建設業協会は、昭和31年7月14日、当時の茨城県知事友末洋治殿より公益法人としての認可を得、現在に至っております。

顧みますと、大正6年、当協会の前身である茨城県土木建築請負業組合が結成されて以来、幾多の変遷を経て現在に至ったわけであり、法人設立当時、会員は320社でありました当協会も、現在810社を数え、全国屈指の協会に発展して参りました。この間、業界発展及び会員育成のため、茨城県建設業協同組合、茨城県建設業厚生年金基金、財団法人茨城県建設技術管理センター等を設立し、県内建設産業界のリーダーとして責任と自覚のもと様々な活動を展開しております。

そして、公共事業・建設業を通して地域経済、地域雇用を下支えし、県勢の伸長発展、建土創出に寄与



し、また会員は、常に技術及び経営に優れた企業の構築に向けて研鑽を重ね、高い理念のもと県民の負託に応えるべく積極的な活動、努力を重ねております。

今後とも会員が一致協力をして、本会の目的である「建設業を技術的、経済的、社会的に向上させ、公共の福祉と会員相互の福利増進を図ること」を達成すべく鋭意邁進して参ります。

続きまして、茨城県建設業協会が本年度実施する行事の一部を紹介いたします。

### 1. 高等学校生徒等による建設現場見学会

建設業協会が、若年建設従事者入職促進事業の一環として平成3年から実施しているもので、本年度は建設関連学科設置の

高等学校	8校	生徒	521名
専門学校	2校	生徒	179名
茨城大学都市システム工学科	学生	80名	
合計	780名		

が参加し、6月18日から11月11日の間に、見学場所は、常陸那珂港、鹿島スタジアム、鹿島セントラルビル、大北川小山ダム、県営住宅など5カ所を学校ごとに選定して見学を行っております。

### 2. 高等学校生等による建設現場実習

これも建設業協会が、入職促進事業の一環として平成6年から実施しているもので、本年度は、高等学校7校、専門学校2校合わせて9校から160名の生徒の参加し、学校ごとに7月6日から8月2日までの3日間50社の事業所(協会員事業所48社、管工事業1社、造園業1社)に2～3名ずつ配置し研修を行いました。

「建設現場見学」も「建設現場実習」も参加した生徒にとっては、教室を出て始めてみる現場なので、鮮烈な印象とインパクトを受けた様子は、見学会あるいは実習終了後に提出してもらった感想文からも窺うことが出来ます。

### 3. 建設フェスタ 99の開催

(1)次世代を担う子供を主対象に、生活社会基盤の整備を使命とする建設業に対する正しい認識と理解を深め、建設業への魅力をアピールする事を目的として、茨城県土木部、茨城県建設業協会、茨城県造園建設業協会、茨城県電設業協会、茨城県空調衛生工事業協会、東日本建設業保証会社が主催して行うイベントで、

- ・重機コンテスト
- ・建設機械体験コ - ナ -
- ・椅子工作などの体験工作コ - ナ -
- ・花、植木の即売コ - ナ -
- ・太陽光発電
- ・家庭用の水まわり設備パネル展示

などが行われます。

#### (2)開催日程

平成11年10月24日(日) 午前9時30分～午後4時まで

(3)開催場所

水戸市千波町 千波公園

< 編集後記 >

「会報」平成11年 第1号

平成11年9月20日発行

各グループで寄稿文を寄せられました皆様には  
大変お忙しいなか御協力をいただきましてあり  
がとうございました。

本年度の会の活動も活発化して参りました。そ  
れに伴って広報活動もより充実した形にしたい  
と考えておりますので、引き続きよろしく御願  
いいたします。

(広報班)